

論文要旨

氏名 山梨 八重子

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

学校教育におけるケア的かかわりの再考

—ケアと正義の視点からの養護教諭の存在意義—

論文要旨 (別様に記載すること。)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体(1枚)を併せて提出すること。
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

論文「学校教育におけるケア的かかわりの再考

—ケアと正義の視点からの養護教諭の存在意義—

本論文は、教育政策ならびに小中学校および高校の教育現場での対立や葛藤を倫理的見地から検討し、その対立や葛藤を解消する一つの思考の枠を提起することを目的とする。対立とそこから派生する葛藤は、教師を含む学校の関係者に大きな負荷となり、ひいては子どもの発達実現を疎外することにつながっている。このことからこの対立構造をとらえ直し、あるべき関係の新たな構築が課題であると考えた。

最も根源的な対立は、学校教育の目的をめぐる解釈である。教育目的として示されているものは、一人一人の子どもの発達の実現と秩序ある社会およびその一員としての市民の形成で、この二つはいずれも学校教育の果たすべき社会的役割として欠くことはできないものであることは衆目の一致するところである。しかし前者が個人の発達や自己実現に焦点をあてる「個別化」であるのに対し、後者は集団および社会の秩序形成に焦点をあてる「社会化」であるため両者は対立関係となり、二つの目的が矛盾せずに実現できるのかという根本的な問いが生じる。この対立は、教育政策では近年の教育基本法改正をめぐる場で表出し、学校現場では子どもの対応とその判断をめぐり、教師/学校と保護者の間だけでなく教師間での対立、とりわけ養護教諭と一般教師との間の対立を引き起こす。

この対立を子どもの発達の実現の観点からみると、「個別化」は子どもの個別性に重きをおく個別性重視の立場の教育観であり、「社会化」は社会の一員として自律した個人の育成に重きをおく普遍性重視の立場の教育観といえる。この個別性重視の立場に養護教諭がおり、教師/学校が普遍性重視の立場にいるとすると、両者の対立は職種の違いによる差異ではなく、依って立つ立場の相違から生じているといえる。この対立が子どもの発達や自己実現を疎外することにつながっている現状をとらえると、「個別化と社会化」および「個別性重視の立場と普遍性重視の立場」の二項対立の解消に向けたあるべき関係が要請される。そこで、学校教育における個別性重視の立場と普遍性重視の立場のあるべき関係を提起することを、本論文ではめざした。

第1章では、学校教育の目的として教育基本法の理念および目的に示された、一人一人の子どもの発達の実現＝個別化および個別性重視の立場と、秩序ある社会や国家の一員としての市民の形成＝社会化および普遍性重視の立場という二つの目的の優位性をめぐる対立を、改正教育基本法の論議を対象に検討した結果、今日では

統治手段とする教育観および社会化/普遍性重視の立場の優位性が一般化している教育であることを解明した。しかしながら人間の自由の実現を根本におくヘーゲル哲学に依拠すれば、個別化と社会化は分離するものではなく、人間の自由の実現は相互承認によって初めて実現するものであり、よって教育目的は両者が連関する関係にある構図となる。このことから両者を二項対立的にとらえる解釈ではなく、「個別化」と「社会化」が環をなすとの解釈に立つことが要請されるとなる。

第2章では、今日なおこの二項対立的解釈に教育が呪縛されている現状があることから、普遍性重視の立場を優位とする学校教育を正統とする土壌を形成したものを、近代学校制度の成立までに遡及し、学校という社会装置が背負わされたものを検討した。

社会化/普遍性重視の立場を優位に位置づける契機を、今日の学校制度のもととなる近代学校に遡及すると、近代学校は社会秩序維持と産業化した労働に適した人材育成という社会の要請の実現のもと、制度やそれを支えるシステムが形成され、それを実現するために社会化/普遍性重視の立場を優位とする学校の基盤が形成されたと考えられる。それが国家の統治手段としての教育観を形成するに至り、学校自身がその内部に、規範重視とその厳格な遂行を可能とするシステムや権威を形成・維持してきたといえる。

子どもの育成は学校教育だけが担うものではなく、家庭における養育の果たす役割も大きい。そこで第3章では、まず子育て観から子ども観をとらえた。近代社会の出現とその成立は、家庭での子育てのありようを変化させ、近代社会で教育する家族の中に子育てが組み込まれる。その後の高度経済成長さらには国際化・情報化などの社会構造の変化が、家族の形態を変え、教育への過剰な期待およびそれによる子ども/親への抑圧、人間関係や仲間関係などの希薄化などが生じ、不登校やいじめなどの問題が生じている事実を取り上げた。そこでこれらの子どもの問題を、変貌する社会に埋め込まれた社会問題としてとらえる発達論の視点から、子どもの存在基盤である生命の維持、安心を含む存在の承認が不可欠で、それが子どもの発達の実現に求められていること、そのために個別性重視の立場からの対応が要請されていることを述べた。しかしそのためには個別性重視が普遍性重視に対置しうる正当性が問われることから、個別性重視の立場がケアから派生するととらえ、ケアの理論の検討が必要とされた。

第4章では、ケアの理論およびケア—正義論争を手がかりに、ケアは人間の生存と存在にかかわり、不可欠な道德であることを倫理学の諸説から確認できた。ケアと正義の両者の道德的特質の対比から、両者は人間の生命や生活に不可欠な道德的価値をもつが、その道德的基盤が異なるためどちらか一方に摂取することはできないとする見解に至った。さらに「ケアと正義」の対立は、教育目的の「個別化と社会化」や「個別性重視の立場と普遍性重視の立場」のそれぞれの対立につながって

いくととらえることができる。先にふれたように、教育の場では、「個別化」と「社会化」の二つは対立的ではなく連関する関係にあり、教育はその両者をもってその目的を実現することから、両者の連関を成立させうる関係の構図が求められる。

そこでこれらの対立を解消するために、それらの根源にあるケアと正義を統合するモデルを検討し、その中で人間の生命や存在に不可欠なケアを優位とし、それを基盤とするケアと正義の編み合わせ論が教育という領域では適切であると考え、その編み合わせの一つである「ケア的かかわり中心の立場」を、教育での統合モデルとしておいた。この立場はケアの脆弱性を権利（正義）が補完するものであり、子どもの権利の侵害に感度が高い点で優れていると判断した。それに加えて対話による合意形成によってもケアの妥当性を確保できる点でも、適切であると判断した。

この論にさらに、ケアの「よき関係の形成と維持」による累進的拡大で形成されるケアのネットワークを組み込むことで、それがもつ脱自己中心性と連帯性および公共性が、正義の脆弱性を補完することから、ケアと正義の相互補完性をさらにダイナミックにとらえることを述べた。

第5章では、前章で提起した相互補完性によるケアと正義の統合モデルを教育に引きよせ、議論を展開した。ここでは最初にケア論を重視したケア一元論に立つノディングスと、ケアと正義の重層的構造論に立つ田中智志の教育論を取り上げた。両者を検討した結果、前者については、ケアが正義を含み込むことは両者の道徳的異質性およびケアのもつ正義感覚が正義のすべてを包摂できないことに加えて、ケアと正義の双方を実現させる使命をもつ教育の特質を考慮すれば、ケア一元論で教育のあるべき関係をとらえることには限界があると論じた。後者の重層的構造の教育論は、倫理的次元ではケアと正義の並存論ないし正義一元論と解釈される理論的な脆弱さを抱えており、また重層的構造の具体的な提示には至っていないため、実際場面での判断を導きだすものとはいえないことを述べた。

教育における個別化と社会化および、個別性重視と普遍性重視の対立の根源には、ケアと正義の対立があり、その対立解消には、ケアを基礎とするケアと正義の相互補完関係での統合モデルが適切であると考え、実際の子どもの対応での対立や葛藤を抱えやすい養護教諭への対応を例にあげ検討を行った。

養護教諭が担う養護はケアと同質性を含み、その職業上の特質から個別性重視の立場に立ち、ケアを核とした仕事を担う。しかしその養護教諭自身には医学的モデルに依拠した子どもにとらえ方に陥りやすいために、普遍性重視の立場に通底するものを孕むという問題がある。また養護教諭/保健室およびケアの閉鎖性がケアとしての養護の実現の障壁となること、およびその閉鎖性の打開が課題となるととらえた。

これらを打開する糸口として、親密圏/公共圏と共同体という空間/領域の概念を援用し、養護教諭/保健室を親密圏とすれば、それが公共圏および共同体とをつなぐ紐

帯となりうるととらえ、ケアの基盤である「よき関係」を媒介としたケアのネットワークが、これらをつなぐものであると論じた。これによってケアとしての養護の実現の上での課題であった養護教諭/保健室の閉鎖性を打開する可能性を予見できた。

この紐帯としての養護教諭/保健室の位置づけを、教育の目的である「個別化」と「社会化」の連関の観点からとらえれば、ケアと正義の相互補完関係に親密圏と公共圏という空間/領域概念を重ね合わせることで、個別化である発達の実現と同時にそれが社会の一員としての社会化との連関する関係をとらえることができると考えた。それは同時にケアとしての養護の質的な深まりを引き出す視点を提供すると考える。

以上のことから、教育における個別性重視の立場と普遍性重視の立場のあるべき関係を、ケアと正義を編みあわせる統合モデルの一つである「ケア的かかわり中心の立場」に立ち、個別性重視の立場を基礎とし、普遍性重視の立場がその妥当性を補完し、また個別性重視の立場のネットワークによって形成される脱自己中心を伴う連帯性・公共性が普遍性重視の立場を補完するという相互補完的關係を内在させたものにとらえる。本論文では、両者の関係をとらえるこのような思考の枠が、学校および教育で生じる対立・葛藤を解消する可能性があるとの結論にいたった。